

近世の別海を探る 「ベツカイ」～その1～

9月15日(火)から附属施設加賀家文書館にて第7回特別展「近世の別海を探るⅡ」が開催されます。当館では、「加賀家文書」をはじめとする近世文献史料の調査研究を開館以来実施し、江戸時代の別海町の様子を明らかにしています。

地名で残されているものは、約120ヶ所を数え古くからの人々の生活の痕跡のあらわれを示しています。今回は町名の元となった「ベツカイ」を近世文献資料により紹介します。

○前期松前藩時代 17世紀～18世紀

17世紀はじめ、和人は松前を中心とした地域に勢力をはっているだけで、道東は東隅(メナシ)と呼ばれ、和人には未知の世界でした。メナシとはアイヌ語で東方を意味します。

寛文9年(1669)の「寛文蝦夷の乱」ころから、別海と思われる地名が少しずつ見えはじめます。

・「へけるし」

『寛文拾年狄蜂起集書』 則田安右衛門 寛文10年(1670)

・「イコ(カ)ハカ犬国」

『津軽一統志 蝦夷乱状況地図』 相坂兵右衛門ほか
寛文10年(1670)

・「べけるる」

『元禄御国絵図』 松前藩 元禄13年(1700)

・「べけるへ」

『松前嶋郷帳』 松前藩 元禄13年(1700)

・「伊古波加犬カ国」

『和漢三才図会 蝦夷之図』 寺島良安 正徳2年(1712)

・「へケル」

『蝦夷国全図』 林子平 天明5年(1785)



『蝦夷物語』 加賀家文書館蔵

松前藩の成立後、勢力の伸展は場所の開設となり、安永3年(1774)に別海町をふくめた東部奥蝦夷地の各場所を最初に請負ったのは飛騨屋久兵衛でした。この頃から当地方のことが書かれた文献資料が多くなってきます。

しかし、「ベツカイ」に関する記述は、ごくわずかで地勢やアイヌの人名などがあります。アイヌ集落の存在は、この後の史料に記述されますが、この頃から集落や住居があったと考えられます。

・「一 へツカイ 此処平山木ナシ砂濱行」

『松前地井東蝦夷地明細記』 高橋壮四郎他 寛政9年(1797)

・「臈乙名ポロヤへツカイ へツカイ ハシタ相ノ へツカイ サンケシ相ノ」

『蝦夷日記』 木村謙次 寛政10年(1798)

以後次号～その2～で紹介いたします。

実習生の目

当館では、学芸員資格取得のための「博物館実習」及び中・高校生・専門学校の学外インターシップの受け入れを行っています。今年度、帯広大谷短期大学(1名)、釧路工業専門学校(2名)の受け入れを行い、所蔵資料の整理・教育普及活動のお手伝いなど当館の仕事についての実習を行いました。

郷土資料館で「核」となるのは、「展示」であり、郷土の歴史や自然を資料(展示物)で伝えるという大きな役割があります。実習初日に「展示」について実習生の率直な感想を書いてもらいました。

この「実習生の目」は、今後当館を運営して行く上で大変参考になり、今後こうした意見・感想を色々な方からいただくためにも必要なものと考え、今回ご紹介したいと思います。

郷土資料館の展示では写真で説明されているのと展示されている道具とがあってないのでわかりにくいと思います。解説パネルの置き方は車椅子の方でも大人でも子供でも見やすいようになっていると思いますが、廃校利用のため段差が多く、車椅子の方達は利用しにくい作りになっていると思います。神棚が海のコーナーにあるのですが、繋がりがよくわかりませんでした。林業の展示は、木の説明と木目が見れるようになっており、わかりやすいと思います。自然との闘いなどメインテーマがわかりにくくなっているのもっと全面に出していった方が利用者もわかりやすいと思います。チョウの標本は道順にそっておいてあり見やすくなっていると思います。石器が実際に使えるということを写真を通してアピールしているので記憶に残りやすく、理解しやすいと思います。考古の所に鳥が置いてありましたが繋がりがわかりません。土器や石器に触れられるというのは視聴覚の展示として効果的であると思います。

加賀家文書館では映像上映が何分か書いてあると良いと思います。見せたい所にスポットライトが当てられており、どこを見せたいかがわかるようになっている。自分で文書を読んでいくという作業が多いので疲れてしまうかもしれません。それを配慮してなの後半は文字よりも展示物が多くなっていました。歴史年表も日本史・北海道史・別海町史と比べて見ることができわかりやすくなっていると思います。最後に置いている大きなつぼは何かわかりませでした。最後に自分で押して検索できるシステムがあったのですが、あれはわからなかったこと、もう一度見たいものをわかりやすくまとめているので良いと思います。只堅い雰囲気があるので一般の方には入りにくいのだと思います。

自分は、郷土資料館などめったに来ることがなくあまりおもしろいイメージがなかったが、いざ見てみると「マンモス」が北海道に生息していたなど、自分の中では「マンモス」は外国にいるものばかりだと思い込んでいたので驚きです。他にも「石器」などは知っていましたが、石鏃や石斧は初めて知り、石器の種類の多さに驚きました。特にサケを石器で切り身にしていく工程写真はわかりやすく、切り身をよく見ると現代の包丁がいかにかすごいかがよくわかります。やっぱり文章で淡々に説明を書かれてるよりも実物を見た方がかなりわかりやすいです。動物の剥製や使用されていた作業具など写真やテレビごしに見るのとはまた違った感じがします。自分のような別海に来たこともなかった人間には別海町周辺の地形模型図はかなりわかりやすかったです。模型で見た野付半島はずいぶん独特の形状で昔、人が住み栄えていたとは思えないです。文書館の方は資料館と比べて模型などがなくわかりづらいかと思いましたが、ビデオや資料が展示されていて思いのほかわかりやすかったです。特に昔に書かれた日本地図などは海岸線だけで内陸の方が書かれていないことに興味した。

北海道でマンモスが見つかるなんて思っていなかったためにマンモスの臼歯が展示してあってとても勉強になった。しかし、展示してあった位置が入口から遠かったため発見が遅れてしまった。もう少し入口付近に展示してあげると発見がしやすかった。マンモスの臼歯の展示している隣に動物の剥製があり、クマやアザラシなど普段テレビなどでしか見たことがなかったので細部を観察することができた。展示している位置もマンモスの隣だったため観覧しやすかった。スクレイパーや石斧など古代の人々が使っていた道具もまとめて展示してあったため観覧しやすかった。ただ、道具の説明が少し足りない感じがした。実際にスクレイパーなど説明してもらうまでまったくわからなかった。マンモスや動物の剥製の展示とは逆に昭和初期の人々の生活を支えていた道具が展示してあった現代でも使われている道具が多かった。その近くにあった表に現在と昔の物価の違いが簡単に書かれていた。表も見やすくとても勉強になった。字が削れていて読めないところがあったのが残念だった。昭和の道具の展示しているすぐ下のゾーンには鳥やアザラシの展示がしてあった。白鳥を普段見ることなんてないので、白鳥の足が水かきになっていたことには驚いた。ただ昭和の道具と白鳥などの剥製の関連性がまったくわからなかった。白鳥などの鳥たちの剥製、入口から右側の剥製とまとめて展示した方がいいと思った。次に訪れた文書館では別海町の歴史、特に野付半島に人が住んでいたことに驚いた。しかもその中心となっていた人物が本州の加賀家の人々でした。特に三代目の加賀伝蔵の働きが大きかった。加賀家の古文書など展示物の配置場所が良く観覧しやすかった。建物の作りもちょうど今、高専の講義の一つの設計実習で設計している展示施設の参考になった。

別海町郷土資料館だより No.122

発行日 平成21年9月4日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記

15日(火)から特別展を開催します。ぜひ、お越しください。／今回3人の実習生の感想を載せました。自分も経験しましたが、果たしてこんなにするどい「目」をもっていたかどうか疑問です。当館の良い点・悪い点が率直に書かれ頭の下がる思いです。(K.I)